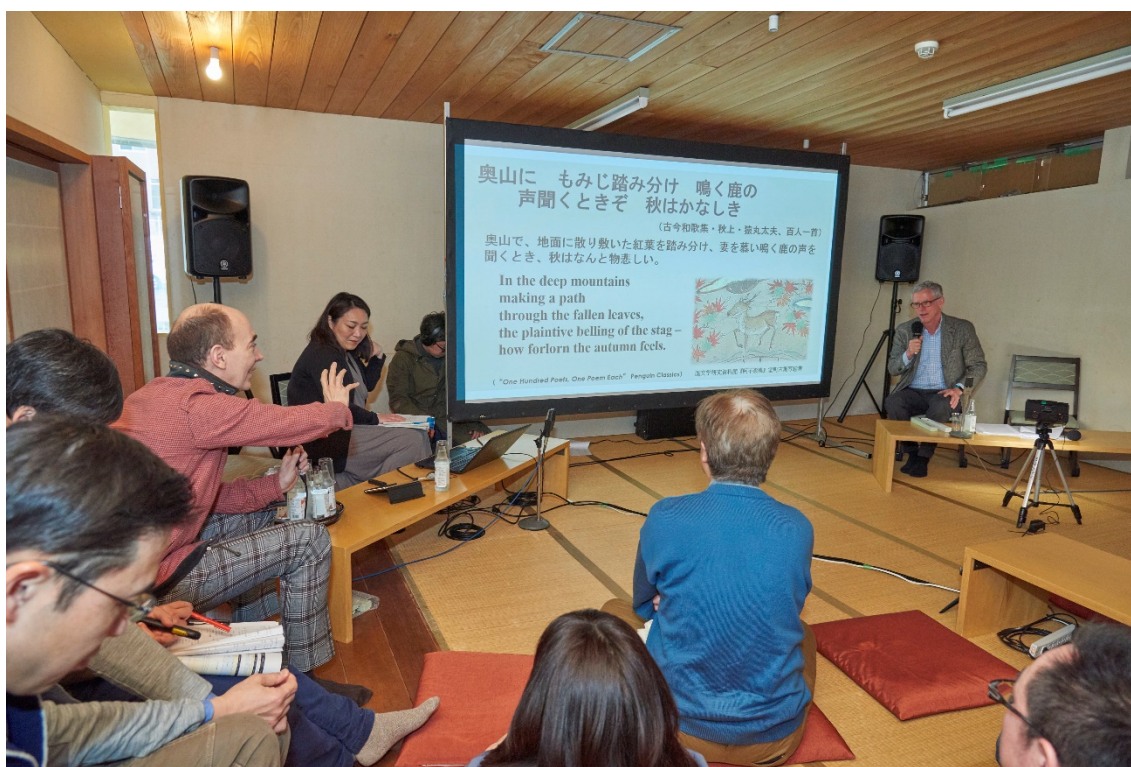


平成 30 年 3 月 9 日（金）

## ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 「デジタル発和書の旅 湯とアートが鳴子で出会う」 ピーターマクミランさん×小山順子先生

3月9日に鳴子温泉早稲田棧敷油にて行った「デジタル発 和書の旅 湯とアートが鳴子で出会う」（共催：凸版印刷（株）／大崎市）では、TIR（招へい翻訳家）としてないじえる芸術共創ラボにご参加いただいている、翻訳家のピーターマクミランさんにご登壇いただき、古典籍を参照しながら、和歌がご専門の小山順子先生（当館准教授）と共に、ご関心の在りどころや現在の取り組みについてお話いただくワークショップを行いました。



### 【マクミランさんのご関心と扇の草紙】

翻訳家としてのみならず、詩人としても活躍されている多才なマクミランさん。もともと、絵画と韻文が融合した形態の作品に関心を抱いておられました。

そのご関心のもとに、国文研所蔵の古典籍をご覧いただいたり、教員と話し合いを重ねたりして、マクミランさんに英訳に取り組んでいただき、世界へ紹介するのにふさわしい作品を選出しました。

それが、「扇の草紙」と呼ばれる一群の作品です。

平成 30 年 3 月 9 日 (金)

「扇の草紙」とは、扇の枠の中に絵が描かれ、その周囲に和歌に関連する和歌が配された形態の作品群です。恋田助教のお話によると、冊子本、卷子本、屏風など様々な形態の「扇の草紙」があり、しかもそれぞれ少しずつ絵や和歌が違っているため、本当に多くの種類があるそうです。

当館には、卷子本形態の『阿不幾集』<sup>1</sup>と、絵と和歌が配された料紙が貼付されている屏風<sup>2</sup>があり、マクミランさんは現在この2点の扇の草紙翻訳に取り組んでおられます。

鳴子でのワークショップでは、マクミランさんによる翻訳と、その訳にたどり着くまでの工夫や解釈についてお話いただきました。

国文研蔵『阿不幾集』(一部)



国文研蔵「扇の草紙」



<sup>1</sup> 請求記号 99-73 (<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200006812/viewer>)

<sup>2</sup> 請求記号 99-151 (<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200015700/viewer>)

平成 30 年 3 月 9 日 (金)

## 【誰が紅葉を踏んでいるのか？】

まず紹介されたのは、

奥山に もみじ踏み分け鳴く鹿の 声聞くとときぞ 秋  
はかなしき

『阿不幾集』／出典：古今和歌集・

秋上・猿丸太夫・百人一首)

現代語訳：奥山で、地面に散り敷いた紅葉を踏み分け、  
妻を慕い鳴く鹿の声を聞くと、秋はなんと物悲しい。

という歌が配された扇です。



卷子本『阿不幾集』に注目してみましよう。

鹿が紅葉の中を歩いており、いかにも秋のもの悲しさを表現した絵が描かれています。

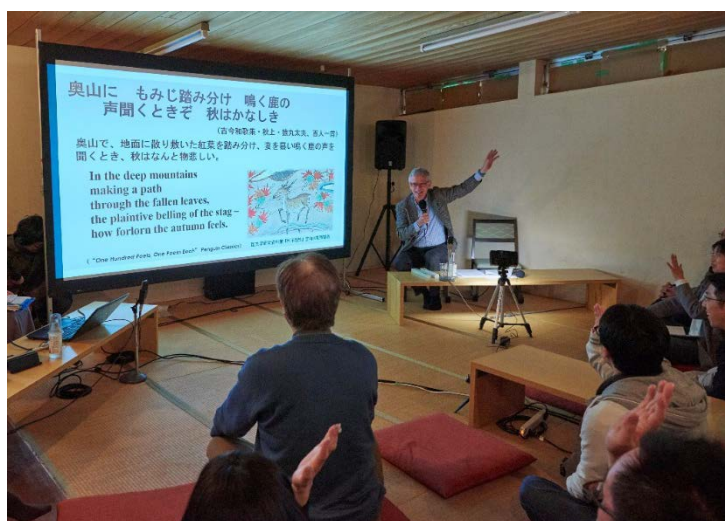
最初、マクミランさんは、この和歌を以下のように英訳されました。

Rustling through the leaves, / going deep into the mountains, / when I hear the lonely  
deer / belling for his doe, / how forlorn the autumn feels.

「I」という主語は、マクミランさんが補われたものです。

そういえば元の歌には主語がありません。紅葉を踏み分けているのは歌人なのか、それとも鹿なのか……どちらにでもとれてしまいます。

マクミランさんが、会場の皆様に「紅葉を踏んだのはどちらだと思いますか？」と質問されたところ、それぞれ半分ずつ位の方の手が挙がりました。やはり決め手はなさそうです。



平成 30 年 3 月 9 日 (金)

日本語では、主語が明記されず、文脈から読み取ることがよくありますが、英語は主語がなければ成り立ちません。文法上の事情から、英訳する場合には主語をどちらかに決める必要があります、マクミランさんは「I」と主語を翻訳されたそうです。

しかし、この歌を詠んだ歌人は、紅葉を踏んだのが誰か、ということをはっきりと決めていません。マクミランさんは、その点を重視すべきではないかと考え直されたそうです。



境界を曖昧にするという選択は、日本人の自然との関わり方と大きな関係があると考えられたマクミランさん。

欧米においては、自然と人間は対立関係にあり、外から眺めるものであるのに対して、日本においては、人間の営みと自然との一体感が重視されていると感じられたそうです。

そして、歌人が主語を明確にしていなかったのであれば、どちらにもとれるように訳すべきではないかとの想いから、以下のような英訳が生まれました。

**In the deep mountains / making a path / through the fallen leaves, / the plaintive  
belling of the stag / how forlorn the autumn feels.**

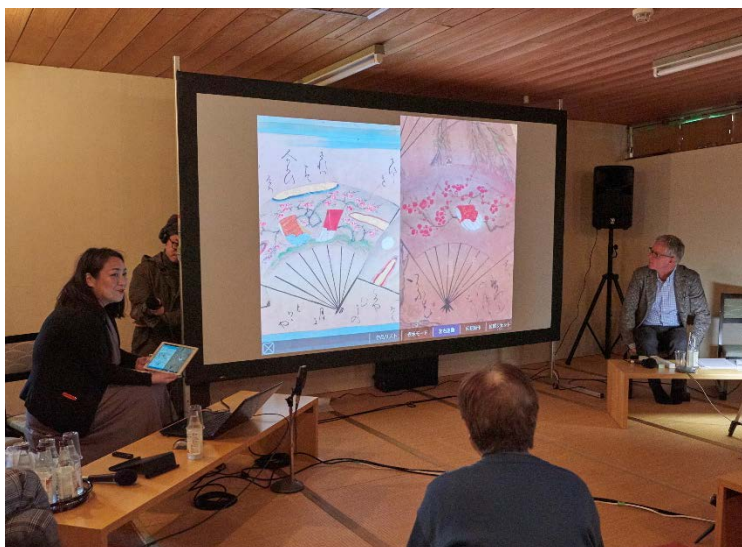
英語であっても、ポエムではルールを崩しても良いという考え方に基づき、主語を無くし、より原作に寄り添った英訳を試みられています。

### 【日本人の美意識】

マクミランさんは、翻訳に際して、和歌の根底にある美意識を表現することを大切にしておられます。

平成 30 年 3 月 9 日 (金)

それは、扇の草紙の実物をご覧になり、より一層強く感じられたといいます。



まず、日本の文化の中では、絵画と韻文と一緒に楽しむという感覚を非常に大切にしているという点に気付かれたそうです。

たとえば和歌には、実景をもとにしたものだけでなく、景色などを描いた絵をもとに詠まれたものも多くあります。『扇の草紙』の屏風に、絵と和歌と一緒に描かれているのをご覧になった時、それらを一緒に楽しむという日本人の感覚がよく表れている作品のひとつだと感じ、わくわくされたそうです。

また、和歌が共通認識を大切にするという美意識にも関心を抱いておられます。

たとえば、二種類の『扇の草紙』には、どちらも「梅の花 誰袖ふれし匂ひぞと 春や昔の月にとはゞや」という和歌が書かれており、どちらにも、梅の木の枝に袖が掛けられている絵が添えられています（写真左は屏風「扇の草紙」、右は卷子本「阿不幾集」）。



平成 30 年 3 月 9 日 (金)

このような和歌の情景には、こういった絵画を添えるという共通認識があるということが端的に表れている例でしょう。

マクミランさんは、こういった美意識をも表現できるような翻訳を目指したいと考えておられるのです。

## 【自然と人間】

このような感覚から、マクミランさんが特に注目しておられる歌があります。

琴の音に 峰の松山通ふらし いくれの緒より 調べそめけむ

(阿不幾集／出典：拾遺和歌集・雑上・徽子女王)

現代語訳：琴の音に、峰の松風の音の調べが通い合い、美しく響いている。いったいこの音色はどの琴の尾から奏で出し、どこの山の尾から響き始めたのであろうか。

この和歌に添えられた絵を見てみますと、松の下で琴を演奏する男性が描かれています。

小山准教授によると、松が風に吹かれて立てる音「松風」と琴の音が似通っているという中国の発想が日本にも影響を与えており、ここでは松風と琴が合奏しているようだと言っているのだそう。

以前マクミランさんが国文研に来館された折にこの歌に注目し、人間の営みと自然との一体感がよく表れている歌だと考えられ、「西洋では自然の音と人工的な音とは全く別と考えるので、それが同質のものであるという発想はないのです」と教えてくださいました。



そして、試みられた訳がこちらです。

The sounds of the koto / Harmonize with pine winds / blowing from the mountain peak.

From which strings, from which mountain foot /

When did this concert begin?

最後の「concert」という語は、「music」など他の言葉と迷われ、4、5回修正なされたそうですが、結局、松風と琴の音が合奏しているという情景がひとつのコンサートと同じだろうと考え、この形に落ち着いたそうです。

『阿不幾集』の絵には、月が描かれているため、月を愛でながら、松風と琴のコンサート

平成 30 年 3 月 9 日（金）

が行われているという情景でしょうか。



工夫はそれだけではありません。

英訳された和歌を鑑賞する時にも「concert」を楽しむことができるように、口ずさんだときに音楽的になるよう、「from which」という語を二度繰り返し、リズムを作っています。

日本の和歌は、詠み上げられたものを耳で聞いて鑑賞するため、音律が非常に重視されます。マクミランさんはその点に注目し、英語で吟じた時に楽しむことができるような工夫を施されたのです。

マクミランさんをご自身で英訳された和歌を浪々と吟じられ、会場の皆様は聴き入っておられました。

### 【鷺が描かれる理由】

「扇の草紙」は和歌と絵画で成り立っており、中には謎解きを楽しむものもあります。「<sup>かささぎ</sup>鷺のわたせる橋におく霜の 白きを見れば夜ぞ更けにける」という有名な大伴家持の歌とセットになっているのは、傘と鷺がなぜか橋の上に立っている絵が描かれた扇です（『阿不

平成 30 年 3 月 9 日 (金)

幾集』。「かさ」と「さぎ」で「かささぎ」……思わず笑ってしまうような言葉遊びもあるのですね。

かささぎの 渡せる橋に 置く霜の 白きを見れば 夜ぞ  
更けにける

(阿不幾集／出典：新古今和歌集・冬・大伴家持、百人一首)

鶺鴒が翼を広げ架け渡した天の川の橋の上に置いた霜が、白く冴えているのを見ると、夜も更けたのだなあと思う。

「かささぎの渡せる橋」とは、七夕に織女がかささぎの橋を渡って牽牛に会うといういわれを踏まえています。

この和歌がどのような情景を詠んでいるのかという解釈にも、二通りあります。

ひとつは、冬の夜空に瞬く星（きらきらした霜）を見て、かささぎの橋を連想するというもの、

もうひとつは、宮中を空に見立てて、階段をかささぎの橋を連想するというものです。

ところで日本ではあまり馴染みのないかささぎですが、マクミランさんの故郷アイルランドでは、よく見かける鳥だそうです。一羽見かけると不吉で、二羽だと縁起が良い印とのことで、一羽見かけてしまうと、慌ててもう一羽探すそうです。

そんなかささぎのビジュアルは、実は黒くて腹だけが白というもの……描かれた鶺鴒とは全く違うものです。

なぜ歌の通りにかささぎを描かずに、鶺鴒を描くのでしょうか。

前に述べたように、和歌の内容は、どちらも「白」というビジュアルがきっかけとなり、連想が働いているものです。

本当に黒いかささぎを描くよりも、白い鶺鴒を描いた方が、歌のイメージに合致すると考えたのかもしれませんが。

さて、マクミランさんはこの和歌を、このように訳されました。

How the night deepens. / A ribbon of the whitest frost / is stretched across / the bridge  
of magpie wings / **the lovers will cross.**



平成 30 年 3 月 9 日 (金)

「the lovers will cross」の部分は、恋人が渡る橋という意味を大切にし、マクミランさんが補われたところです。

さらにマクミランは、英訳を認められた扇を、来場者プレゼント用に準備しておられました。ひらいた扇のアーチ型を、橋に見立てた作品です。

「琴の音に～」の英訳でもそうでしたが、文字情報だけでなく、作品を声に出したときの音楽性や、全体のビジュアルなど、あらゆる側面から総合的に作品鑑賞を楽しめるように工夫を凝らしておられるマクミランさん。

今後の取り組みが大変楽しみです。



また、ただ元の意味に対応する言葉を選ぶだけではなく、日本における美意識を、最も良い形で表現しようと、様々な試みを行っておられる過程をお話いただき、大変充実したワークショップとなりました。

平成 30 年 3 月 9 日 (金)

